

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷五十二第

行發日一月九年二和昭

論 叢

營業稅の課稅物件の地方分別難 法學博士 神戶 正雄
文化現象の凝集作用 法學士 恒藤 恭
純粹 國 家 法學士 作田 莊一

時 論

獨逸社會民主黨の農政綱領 法學博士 河田 嗣郎

說 苑

琉球の廢藩と日支兩屬關係の終末 法學博士 山本美越乃
植民及び植民地の意義 經濟學士 長田 三郎

雜 錄

英領東アフリカの現状と其將來 經濟學士 田島 正雄
同盟罷業保險の現状 經濟學士 近藤 文二
八日市の起源と歸化人 經濟學士 菅野和太郎
地方財政と累進稅比例稅 法學士 沙見 三郎

法 令

議院法中改正法律・震災手形處理委員會官制・公益質屋法施行規則・米及穀の輸入稅免除の件廢止

純粹國家（其四、純粹國家）

作田莊一

一〇 純粹國家

是まで人々が國家と名づけられるものを如何に解するかと云ふに、何人も國家は獨立せる權力、支配の組織であるとする點だけは略ぼ一致してゐる。而して現在までの國家は凡て領分國家であるから、各領分に於て獨立せる權力は、支配を受ける行動の主體と場所とを限定することによつて、領民主權と領地主權とを成立たしめる。かくて國家と云ふは、領民と領地との上に權力を以て支配することと特徴とする所の、人々の結合組織であると云へる。かゝる見解は我等の日常の經驗に訴へ得る所の國家の外的現象を見たものであるから、何人も國家がかようなものであると云ふことに異論はない。然るに近代に勃興したる自由主義の思想及び運動は、かゝる權力支配が個人の自由を抑壓するものであると云ふ見地から、權力支配を出来るだけ制限しようとし、又は極端に走つてこれを全廢しようとし考へるに至つた。是に於てか權力支配是非の論が盛んにな

り、その主張を理由付けるには、外的現象たる権力支配が果して何を意味するかを尋ねその内的本質を究明する必要が起つた。現實の國家は歴史的に發展し來つたものであるから、一樣に權力支配と云ふもそれが何の意味にて行はれるかと云ふことは、場所と時代とによつて必しも同様とは言ひ難い。例へば我が中古王朝時代に班田收授の制を布いたのも権力支配があり、徳川時代の諸藩の中、農民をして逃亡せしめるまでに土地產物を誅求したのも権力支配である。従つて我等は唯だ、國家は権力支配の組織であると云ふ外的現象を知るだけでは満足しないで、何人も一般に承認する所の外的現象から出發して、その現象の奥に存する内的本質を探り、その本質と本質の現象への表現状態とを明かにしようといふやうになつた。現實の國家は場所と時代とに應じて種々の成素を具へ複雑なる構成となつてゐるが、國家の本質は、現象としての國家がこれあるによつて成立しこれを失ふによつて消滅すると云ふほどに、國家現象の生滅を決めるだけの意義を有つてゐる。又國家の本質は複雑なる國家組織を支持する中柱であつて、この中柱さへ残つて居れば他の構造がどうなうとも國家の存立を危くすることはないが、若しこれが倒壊するならば他の構造は暫らく外觀を存し得ようとも間もなく全建築が倒壊しなければ已まないと云ふほどに、國家持續の運命を決めるだけの意義を持つてゐる。従つて國家は何であるかの間に答へて、凡ての國家現象を説明し得る見解としては、現象以上に國家の本質を指示するを要する。國家は

非の討論は凡てこの本質論に基いて行はれなければならぬ。而してかゝる意義を有する國家の本質がそのまゝに表現されたものが即ち國家の純粹なる相である。

純粹は雜糅と對稱される。白米に對する粳や千粒の金に對する金鑽石やが純粹と雜糅とであることは言ふまでもない。純粹意志は全く自然から解脫した意志であるが、尙ほ衝動力に惱まされる意志は雜糅意志である。神を讚美して餘念ない時の耶蘇は純粹的基督であるが、神何ぞ吾を捨て給ふやと悲嘆する時の耶蘇は雜糅的基督である。もと純粹は不純と對立する。純粹のものと不純のものが一つに合體して存するとき、それを純粹に對して雜糅と云ふ。然らば純粹と不純とは何に據つて別たれるか。

純粹と不純との區別は我等が現實の存在を認定する場合と實現の適合を判定する場合とによつて趣を異にする。適合を判定する場合には、我等は實現しようとする生活目的を標準として判定を受ける對象に就て純粹と不純とを區別する。一物が二以上の成素又は性質を有するときは、我等はこれを種々の生活目的に照らして如何なる效能又は反效能あるかを判定する。反效能は勿論、效能と雖も其等が相互に補足するか又は一が他を助長するものでなく、却つて互に撞着し又は牽制するものならば、其等を或一定の生活目的より見るときに、その目的實現に適合する成素又は性質が純粹のものと見られ、然うでないものが不純のものと見られる。例へば雜糅物たる粳

の中に、白米が純粹物であり、穀殻や糠が不純粹物である。然るに現實の存在を認定する場合に
は判定に於ける生活目的の代りに事物の本質が純粹と不純とを引分ける。或現象を認定するど
き、その中にて本質を表現するものが純粹態と見られ、本質と一致しない他の屬性を表現するも
のが不純粹態と見られる。現實の狀態は概ねかゝる純粹態と不純粹態とが合體して雜糅態を呈し、そ
れが先づ我等の知覺に上るのである。従つて存在の認定にあつては、純粹と不純とは唯だ本質的
なものなりや否やの區別に止まり、これらに對し一が望ましく他が望ましくないと云ふやう
な價值判定は含まれてゐない。例へば外的現象に於て水と認められる物體の本質は、水素二・酸
素一の化合であるが、その化合物を純粹の水と見る。現實の水は多くは種々の有機物などを含む
が、これが不純粹物である。又外的現象に於て繪畫と呼ばれるもの、本質は、平面の形象を通じて
利害正邪に拘らない觀照的美感を與へる性質を指すのであるが、この性質を表現するものが繪畫
の純粹の相である。繪畫にはその他の感情を誘發し又は何かの知識を與へる部分もあるがそれら
は皆不純粹態と見られる。

斯の如く存在の認定に當つて區別される純粹と不純とは専ら現實態に就て見られる事實的斷定
であつて、純粹態は決して理想態を意味しない。純粹態はそれだけ遊離されて存在することは稀
であるが、しかしそれが具體的現實態の中に實在することは恰も金鑛の中に金が實在し、現實の

貨幣の中に價值標章が實在するやうなものである。我等は金鑛を精練して純金を手にし又は貨幣を改造して價值標章のみに仕上げようと試みるが、それは勿論理想の實現であり、その結果は觀念的でなく現實に純粹態のみが引き出されてそのみが實在することゝなる譯である。併し金鑛の中に金が、現在の貨幣の中に價值標章が實在してゐると云ふことは、何にも理想を語るのではなく、唯だ現實を指摘するに過ぎない。意志現象は自然現象と異り、現象の内容が目的の實現であり、これを現實として認識の對象に置くときに意志現象となるのであるから、やゝもすれば認識に於て取扱はれる理想と、實踐的に實現しようとする理想とが混同される。後の場合には理想は觀念として懷かれ、前の場合には理想であつてもこれは一の事實として取扱はれる。然るに吾人が意志現象の認識に就て純粹態を示すとき、それを直に理想又は觀念を提言するものであつて現實を指示するものでないと云ふやうに迷斷し誤解する者もあるが、斯の如きは我等の認識の對象に自然現象あるを知つて意志現象あるを知らないからである。

私は今國家を問題としてゐる。それに就ては専ら存在認定の問題を取扱ふに止め、適合判定の問題には觸れない。従つて私は何が國家の本質なるかを探り、それによつて國家の純粹態を指示したい。國家は獨立せる權力支配の組織であるが、先きに述べたるやうに、この權力支配は獨立せる人格者の行動であり獨立せる意志の活動であることは疑ない。又その人格者若くは意志の存

する所以は基本團體の共同組織から來ることも亦疑ない。從つて獨立せる權力支配の現象から必然的に基本的共同組織に歸入し行くことが出来る。然らば國家の本質は直にこの共同組織を意味するかと示ふに、かく斷定するにはその共同組織が尙ほ餘りに複雑である。我等は更にこの組織に就て本質的なものを探る爲に、眼前の水を分析して純粹の水を求めるやうに、國家の組織を一々分析しなければならぬ。私はその分析に當つて國家の組織を基礎的組織と建設的組織とに分別して一々その内容を調べて見た。その中でも一層重要なものは基礎的組織であるから、主としてこの組織に於て本質的なものを見出さなければならぬ。

國家の基礎的組織の中には固有共同層と從屬共同層との二つがある。從屬共同層は基本團體に於ける一般の秩序を維持する限度に於て共同組織の中へ收められるが、その實質は固有共同層が從屬共同層に對する壓略であつて、固有共同層に於ける統治としての秩序維持ではない。是に於て權力支配は先づ統治支配と壓略支配とに分別せられる。然らばこの二種の支配の中孰れが基本的であるかと云へば、無論統治支配であつてこれから壓略支配が派生したのである。原始狀態に就て言へば、太古の牧畜民族が農耕民族を侵略せるとき始めて壓略支配を生じたと言はれるが、此時已に牧畜民族にも農耕民族にも各自の統治支配が先行してゐる。又一の定住民族が他の定住民族を征服し、前者が後者を連れ歸つて奴隸的壓略を加へるときにも、これらの各民族にも已に

統治支配が先行してゐる。苟も壓略支配の存する所には、必ず壓略團體の方にそれ自らの統治支配が存し、被壓略者はその統治支配の組織を破壊されて他から壓略支配を受けるのである。

統治支配が本となり、壓略支配はこれに附隨して派生する。然るに一旦壓略支配が発生するも支配民族が格段に寛容性に富み優秀なる文化を有するときは、漸次に從屬民族と通婚し且つこれを同化する。この場合には壓略支配は次第に減退して統治支配がこれと代つて擴張される。大和民族を中心として發達せる日本民族の統治支配はその適例である。又壓略支配の中にも從屬民族の文化が優秀なるときは、最初の奴隸的壓略が奴隸解放によつて市民的壓略に變じ、次で壓略者と從屬者との間に同化が行はれて、壓略支配は漸次に統治支配の中に没し去ることもある。西洋の種族鬭争の過程にはかゝる場合が多い。更に又、壓略者と從屬者とが民族を異にし又は定住地域を異にして融和し難き場合に壓略支配が苛酷に行はれるときは、從屬共同層の中にそれ自身の固有共同層を發生せしめ又は在來のものを強固ならしめて、壓略團體に對して反旗を翻へすに至る。その結果は支那の歴史に見る如く外來の壓略者を追出するか、或はアメリカの歴史に見る如く母國に對して獨立の統治支配組織を建立することとなる。

斯の如く從屬共同層又は壓略支配關係はその性質が暫有的・附隨的のものであつて、早晚、固有共同層又は統治支配關係に合體するか若くは分離して別箇の固有共同層又は統治支配關係を建立

する。又如何なる國家も凡て又は常に從屬共同層又は壓略支配關係を有すとは限らないで、單に固有共同層又は統治支配關係のみの國家を見ることは決して珍しくない。これに反し、如何なる國家組織と雖も固有共同層又は統治支配關係を缺如することは考へ得られない、またそんな事實も存しない、蓋し固有共同なくしては權力の成立する根柢がないからである。されば國家組織の中に從屬共同層の存すると否とは本質的には國家の存在に何の關係もなく、固有共同層に於て統治支配が存する限りはそこに國家在りと言ふことが出来る。團體壓略は昔に比べ今日に於ては著しく減退し、今後は益々減退し行く傾向がある。併しその故を以て我等は國家が漸次に衰頹しつつあるとは考へない。斯く見るときは國家組織に於ける從屬共同層は國家にとつて本質的な要素ではなく、その表現たる壓略支配としての權力支配は國家現象にとつて不純部分に過ぎない。國家の本質及び純粹態はこれを固有共同層及び統治支配關係に求めなければならぬ。

然らば次に國家組織に於ける固有共同層は直に國家の本質と見られるであらうか。この共同層は、先に述べたるやうに、自律共同層と他律共同層との二つから成立つてゐる。自律共同層は全く自由に或は團體に托せる自己強制に堪えて共同意志に適從する人々又は行動の範圍を指し、これこそ完全に共同參與による全體目的の實現を事とする共同組織である。他律共同層は同一の固有共同組織を構成する點に於て自律共同層と異なる所なきも、自ら共同關係に立つ意志を具へない

點に於て不完全な共同者である。然らばこの二つの共同層に於て固有共同層の支持者として孰れが主であり従であるかは殆ど問ふまでもあるまい。自律共同層は自ら獨立して存在するのみでなく、更に能動的に他律共同層を固有共同層の中に包攝し支持してゐるが、他律共同層は單に所動的に固有共同に参加してゐるに過ぎない。大衆の團體自覺が廣まり深まるに従つて他律共同層は次第に自律共同層に移轉して行く。近世の初めに頭を擡げた「我の自覺」は最近に至つて驚くまでに大衆の間に廣つて全く劃期的現象を呈してゐる。併しその我の自覺も尙ほ未だ團體自覺に止つてゐる。それが後に述べるやうに漸次に團體自覺に進むにつれて、他律共同が減退し自律共同が擴充する。凡ての人に團體自覺を求めることは至難であるから、他律共同層が從屬共同層のやうに全く消滅する日が到來するであらうとは斷言し難いが、その方向をとつてゐることだけは確かである。これと異り自律共同はその源泉を人間の根本的性質に求め得べく、人間の生活は最初から共同生活を以て出發してゐる。自律共同が外敵に對面して始めて成立すると見るは甚しい謬見である。外敵は共同を堅固ならしめる條件たるに止まり、共同の基礎は共同者の内的性質に存する。管絃團の共同組織は外部からの刺激によるのではなく、音樂を創造しようとする人々の内的要求から來り、この要求を實現するに當つて一箇の創造を多くの行爲に於て分擔する所に共同組織が生れる。基本團體に於ける共同組織、特に自律共同の發生する事情もまたこれと同様に見るこ

とが出来る。自律共同は自發・自存の共同である。

固有共同層の中、自律共同層は自發・自存の共同であり、他律共同は參加・依存の共同である。一は常住的であり、他は暫有的である。一は他を須たすして起り、他は一を須つて始めて存在し得る。斯く見れば固有共同層の中に於て自律他律の孰れが本質的共同なるかは自ら明かである。統治支配たる權力の源泉は一に自律共同層に存し、他律共同層はこの權力によつて支配されるのである。尙ほまた權力を成立たしめた自律共同層に於ても、その層を構成せる一々の個人又はその人々の一々の行爲に對して權力支配が行はれることは避け得られない。個人であつても又それが非凡の高徳者であつても、少しも自己強制を要しないほどに至き自由の意志に成り切ると云ふことは極めて困難である。又自己強制の中には腿を抓つて唾を忍ぶやうな物質的方法によるものもある。されば特殊目的に限られ人々が任意に加盟する派生團體の共同組織に於ても、共同意志が團體員の意志を強制するのが通例である。況んや同様の個人的利害を有しない人々が人格を擧げて結合せる團體にありては、たとへ各人が團體意志を體持するとしても、各個人の欲する所と團體の欲する所とが常に全然一致すると云ふことは僅かに考へ得られるとしても、現實には起り得ないことである。但し、さればとて權力支配が自律共同の本質であると誤解してはならぬ。事實はその反對にて共同關係が統一的全體意志を生ぜしめ、全體意志から分身意志を制するのである。

が、その統制關係に於て權力支配が成立するのである。故に極限的に考へるときは、權力支配の存しないほどに融和合體せる共同組織は確かにあり得る。併しそれ故に權力支配があつてはならぬと云ふ見解は、恰も物慾から解脱せる聖者もあるから我等も亦物慾を自制する精進努力を必要としないと云ふに類似してゐる。又この場合に權力を以て物質的拘束を加へる強力と解してはならぬ。權力關係の本質は意志關係であり、權力の發動は一の意志がその中に參與する他の意志に對する交渉である。物質的拘束を加ふるは唯だかゝる意志表現の一形態に過ぎない。従つて權力支配に於て腕力の行使が跡を絶つ時があつても、共同意志が個人の意志に對し、その意志に反しても何かの權威ある命令を發する限りは、それは依然として權力支配である。何事をも自然現象として考究し、國家の權力發動を直に腕力行使と同視するは、謬れる自然主義觀の致す所である。

斯の如く國家の基礎的組織を分析して各階層の意義を考へ見るときは、第一に従屬共同層が非本質的な要素であり、そこに現はれる壓略支配が不純態として排斥される。次に後に殘れる固有共同層の中にても、獨立・常住の共同層は自律・共同層であつて、これが國家の本質をなす。この本質を表現する權力支配のみが國家の純粹なる相であつて、これに比べるときは他律共同層に行はれる權力支配は尙ほやはり不純態たるを免れない。現實の歴史的國家はかゝる純粹態と不純態との合體せる雜糅態であり、我等が日常に口にする國家は雜糅國家である。その中にて國家の本

質たる自律共同の結合關係に着眼し、それより發出する共同主義統治としての權力支配の組織を抽出するときは、これが國家の純粹態であり、従つてこれを純粹國家と名づける。我等が實在せる現象として認める國家は雜糅國家であつて、純粹國家がそれだけ遊離して獨自に實在する譯では決してない。併し純粹國家は理想國を説く場合のやうに單に望ましい國家ではなく、粃の中に存する白米の如くに實在する。粃に加工して白米となすやうに、雜糅國家を淨化して純粹國家のみに仕上げようとする理想を懷くのは寧ろ當然の成行であらうが、それはまた別箇の問題である。現實論は唯だ純粹國家の實在を指示するのみである。

以上述べたる國家の純粹態は國家の基礎的組織に就て見たものであるが、更に國家の建設的組織に立入るならば、是處に第二義的の純粹態と不純態とを分別し得るであらう。是處で問題となるは、國家の裁決意志を體持する政府が獨裁制により又は衆決制を裝へる獨裁制によつて行ふ所の階級統治と階級壓略との對照である。この場合に孰れか純粹態であり將た不純態であるかの斷定は、先に國家の基礎的組織に就て言へる結論から當然に演繹せられ得る。裁決意志の構成及び發動が眞の衆決制によることゝなれば階級統治は必然に無階級統治となるが、たとへ階級的であつても統治は共同主義の實現であり、壓略は利己主義の遂行に外ならないから、二者の純不純は改めて言ふまでもない。唯だ是處に問題となる點は、從來の國家活動には共同主義の統治が行は

れないで一に階級壓略の行程を進んで來たと云ふ見解の當否如何である。

マルクス主義の見解では、國家は階級壓略の組織であると見る。この説では國家と政府とを明確に區別してゐないから、階級壓略の組織が直に現實國家の本質であると見る。無政府主義説や種族鬭爭説にマルクス主義を加味した壓略國家説(ラッペンハイマーの國家説の如き)なども大體に於て階級壓略を以て國家又は政治の本質的標徴と見てゐる。故にそれ等の見解では階級壓略を終を告げるときに國家も亦必然に死滅すると斷定する。若し果して然りとせば東西古今の諸國に於て頻出せる政府の革命的交替は何を意味するものであらうか。驕る平氏は久しからずして倒れ質實なる源氏・北條氏がこれに代つた。支那の易性革命は殆ど例外なく累積的に民を壓略する者が倒されて、新に王道を布き少くともこれを標榜して前者より薄く壓略する者がこれに代つて出現してゐる。現代諸國の趨勢を見ても驕れる有産者階級に支持される有産政黨の政府は、困窮に鍛えられて次第に共同組織に向へる無産者階級の無産政黨によつて取つて代られようとしてゐる。近時急激に廣まつた大衆の私の自覺は、初めは無論舊體自覺に過ぎなかつた。然るに無産者たる大衆の私の自覺は必然に社會に於ける生存權の要求となり、この要求を貫徹する殆ど唯一の途は強大なる實力を生ぜしめる共同組織を建設するにある。是に於てか無産者階級によつて漸次に結成せられつゝある共同組織は必然に無産者階級意志を發生せしめ、この意志によつて階級壓

略を廢絶せしめようと試みるに至つた。この無產者階級の運動は一に共同主義によつて起り、又階級壓略を廢止する所以も一に共同主義を實現せんが爲めに外ならない。壓制略取は利己主義・非共同主義より起り、これに對立するものは常に團體主義・共同主義であつて、その實現は即ち統制修治である。古來歴史上の政府變革は概して舊き階級壓略者と新しき階級統治者との交替である。但し統治者と雖も幾分かは壓略を行ひ、壓略者と雖も幾分かは統治を行へるに相違ないが、壓略が甚しく重積するときには必ず政變が起つて來る。若し支配者が交替しながらも、階級壓略に次ぐに階級壓略を以てするならば、民生に安定なく民望を繋ぐ支配者なく、世は無政府状態に陥つて謂ゆる戰國時代を演出するのである。

古から理論としては性善説と性惡説とが對立するが、現實には善事のみを又は惡事のみを推し通はす人は居ない。國家の歴史も亦その通りで古來統治ばかり又は壓略ばかり推し通して來た政府はない。唯だ過去の記録が概ね支配者階級の手に成つたものであるから、政府は統治に専らであつたかのやうな記録が多分を占めてゐる。然るに近時大衆の自覺が廣まるにつれて被支配階級の立場から階級壓略の史實を指摘する傾向が起り、これによつて歴史は著しく改修されつゝある。この傾向は眞實の歴史を表明すべく往く所まで往かねばならぬが、さればとてその傾向に乘り過ぎて國家の歴史は階級壓略を以て終始すると見ることは、また過ぎて及ばざる偏見である。

若しこの見解が眞實なりとすれば歴代の政變は單に壓略階級間の鬭争及び勝敗に過ぎないことゝなつて、壓略階級に對する屈從階級の反抗並にこれを背景とする新政府の組織などは全くあり得ないことゝなる。又歴代の政變が單に壓略者間の抗争に過ぎないことゝすれば、それは單に一の強力と他の強力との對抗する自然現象となるのみにて、基本團體の一面たる基本的共同組織は全く存在しないことゝなる。かくては人間の歴史は生物進化論が教えるやうな純然たる生存競争の變遷に過ぎないものとなり、文化發展の經歴は全く存しなかつたことゝなる。若し果してそうであつたとすれば、古代の共同團體は何を意味するか、未來に望まれる共同團體は何處に成立の根據を求め得らるべきか、又始と終との共同團體の間に於いて超絶的に非共同主義の壓略狀態のみが介在すると云ふことがどうして起り得るであらうか、これらは凡て不可解なことゝなるであらう。

一一 人生に於ける國家の地位

ヘーゲルは國家を以て人間が自由を實現する所の道德態であると見た。國家を一の道德態と見るはヘーゲルに限らず多くの學者の言ふ所であるが、この道德的と云ふは反道德と對立する道德の如き規範的意義に解すべきものでなく、無道德と對立する道德の如き事實的意義に解しなければならぬ。自然には道德なく、自然の社會は道德的實在でない。道德は意志にのみ存し國家は意

志であるからそれ故に道德的實在である。又人間は國家に於て自由を實現すると見るは正しい。蓋し我等は自由を拘束するに過ぎない社會よりも、個人的自由を拘束しながらも却つて共同意志に於て自由を與へる國家に於てのみ自由なることを得るからである。但しその自由の獲得は性格上の自由を境涯に於て伸ばす所の自由の完成であつて、衝動に縛られる奴隸を解放して自由ならしめるものは國家ではない。尙ほヘーゲルは何人にも劣らぬほどに國家を高く評價するが、而かも國家を以て主觀的精神に次ぐ客觀的精神の實現となし、更にその上に絶對的精神の實現たる藝術・宗教及び哲學を置き、就中哲學を最高階段に祭り上げた。ヘーゲルは國王でなく哲學者であつた。それはともかく、彼の見る如く藝術・宗教・哲學を以て國家の上に置くことが人生に於ける國家の地位を正しく見たことになるであらうか。

蓮如の出づるまでの淨土眞宗は佛法爲本で推し通して來た。或一學者は日露戰爭を知らないで研究室に閉ぢ籠つてゐたさへ誇張されて傳へられる。キョルネルのやうな人も居るが、多くの藝術家らしい藝術家は眼中唯だ製作あつて國事を顧みない。學者・藝術家・宗教家など、特に天才と言はれる人達は概して國家に對して冷淡である。この場合に天才達が顧みないやうな國家は人生にとつてさまで意義深きものでないと云ふ考も起り得よう。ヘーゲルの見解は深遠な體系的思想として現はされてゐるが、落着く所は國家の上に天才を置くのである。併し天才は必しも國家

のみに冷淡な譯ではなく、一般に世間を如何にすべきかを問題としない。創造に熱情を持つ者は世間の事には冷淡であり、甚しきは出家して一家一族をも顧みないほどに冷酷な態度をとる者もある。これは如何に解すべきか。

私はこの小篇の最初に於て、人生に通相と境涯との二方面があることを述べて置いた。天才の創造は人生の通相に於ける進歩を引受ける。これと異り國家の任務は人生の境涯に於ける進歩を計るにある。境涯が善くならなければ通相の進歩は望まれない。又如何に善き境涯が與へられても通相の進歩にはそれ自らの原動力が必要である。通相と境涯との孰れが大切であるかと問ふのは、恰も織物の經糸と緯糸と孰れが大切であるかと問ふやうなものである。一が他より重大視せられるのは、蓋し各時代に於て一がより重大なる缺陷を有するが故に外ならぬ。

然らば次に人生の境涯として社會に對する國家の地位はどうであるか。國家は凡て壓略組織であるとなす見方から言へば、人生に於ける國家の地位は唯だ否定されるのみである。マルクス主義のやうに國家は階級壓略の組織であると解するならば、無產者階級の政治革命が成就して階級壓略が廢除される場合には國家は當然に消滅する。併しその謂ゆる國家は消滅しても共同組織は決して消滅する譯ではなく、否寧ろ共產主義の經濟組織を執る以上は益々廣く強く共同組織を進展させなければならぬ。又その時にはそれまで廣く相互組織に委ねてあつた生活交渉の大部分

が新たに共同組織の中に收容されるから、この組織を維持する爲の權力支配は従前に比べて擴大されることも縮小されることはないであらう。尤も共產制を布くときには、更に進んでは世界革命によつて濠洲や南米や露西亞や支那の開発されない富源が、富源の少きに苦しめる勤勉なる國民の爲に公平に分配される時代とならば、物資は必ずや豊富になるに違ひない。併し大多數の人々が自律共同層に加入することは殆ど望み難いから、共同組織を維持する權力支配は殆ど豫想し難い遠き將來にまで繼續するであらう。それが疑ないとするれば、謂ゆる國家の消滅せる後に尙は長く存続すべき基本團體の共同組織、殊に權力支配を行ふ所の共同組織は果して何であらうか。

ヲツペンハイマーの國家に關する見解は次のやうに要約され得る。氏は先づ政治的手段と經濟的手段とを對立せしめ、人が欲望を遂達する手段として自ら勞働し、他人の勞働に對しては等價の自己勞働を提供して交換する場合は、これを經濟的手段となし、同じ手段として他人の勞働を無償にて略取する場合は、これを政治的手段となす。而して國家とは政治的手段によつて結合されたる人と人との一切の關係の總體的概念であり、社會とは經濟的手段によつて結合されたる人と人との一切の關係の總體概念である。従つて是まで國家と社會とは相伴つてゐるが、今後自由市民社會が成立するときには國家はもはや存在せず、唯だ社會のみが存続するであらうと。氏の國家論は過去の政治の闇黒面を曝露して支配者を辯護せる臆見を矯正せる功は認められるも、上

述のやうな見方はそれこそ角を矯めて牛を殺すの類である。勞働と略取と若くは創造と所有とが對立して一が貴ぶべく他が賤むべきことは何人も異論はあるまい。されどその對立を直ちに政治と經濟並に國家と社會の對立に當てはめた所で、それは唯だ在來の概念を破壊するのみにて新に何等の教ゆる所もない。尙ほ等價の交換を以て満足するならば或は自由市民社會にても事足るであらうが、我等の期する所はかゝる相互主義に止まらない。共同負擔及び共同享受の行はれる境涯を望まないとするれば、經世の業は易々たるのみ。

更に英吉利に流行せる必要惡の國家觀を見るに、これらは畢竟、個人主義・自由主義・相互主義・非共同主義が人生の境涯を覆ふに足らないことを消極的に自白せるものに外ならない。又この思想は無政府主義に憧憬しながら而かもこれに近づくことを恐れる立場に居るものにて、英吉利人に特有なる實務的態度の一表現と見ることも出来る。これに比ぶれば露西亞の無政府主義思想は遙かに徹底してゐる。

露西亞の無政府主義思想は壓制的專制政治が播種した收穫の一つであらう。露西亞の國家は過去に於て餘りに不純性に富んでゐた。米國加州の水田を見たときに、日本人の作れる水田には稗が少かつたが、西洋人の作れるものには稻作か稗作かと惑ふほどに稗の多いものがあつた。露西亞の雜糅國家には稗が多過ぎた。さういふ國にて英吉利人と反對に理論を好む人々が水田そのもの

のを放棄しても惜しくないと考へる思想は強ち解されないことでもない。幸に我等の難様國家には太古から瑞穂の稻が榮えてゐる。一時稗が殖ゐたと見たならば殊更に努力してこれを抜き捨てればよい。若しも隣人の水田に稗多しと聞いて己が祖先傳來の美田を呪詛するものがあるならば、その錯誤は笑ふべく餘りに重大なるものと言はなければならぬ。

國家と社會とは基本團體の二元組織である。これらを一元に攝して多即一若くは簡體即全體となすことは思想の上にては可能であるが、これを凡ての人々の日常の行動に現はして矛盾なきを期することは決して容易でない。その一元組織が實境の上に現はれるまでは、簡體のものは簡體に與へよ、全體のものは全體に與へよ。

私は本篇に於て第十節純粹國家の次に一節として國家の發達・進展・完成並に已成の領分國家と未成の世界國家との中間領域に就て概説し、國家の進化過程から幾らか具體的に純粹國家の特徴を指摘する豫定であつたが、本篇が餘り長く續くのでこの點は他日改めて述べて見たいと思ふ。又本篇は國家の本質のみを抽象的に説く目的にて、國家と離れ難い因縁を有する經濟の方面を顧みなかつたから、國家の特質を鮮明ならしめることが出来なかつた。これまた他の機會に於て特に國家と經濟との關係を述べて見たいと思ふ。本篇は要するに國家に關する私見の輪廓に止まるのである。

(終り)